日本英文学会中部支部

# 第 78 回大会プログラム

---

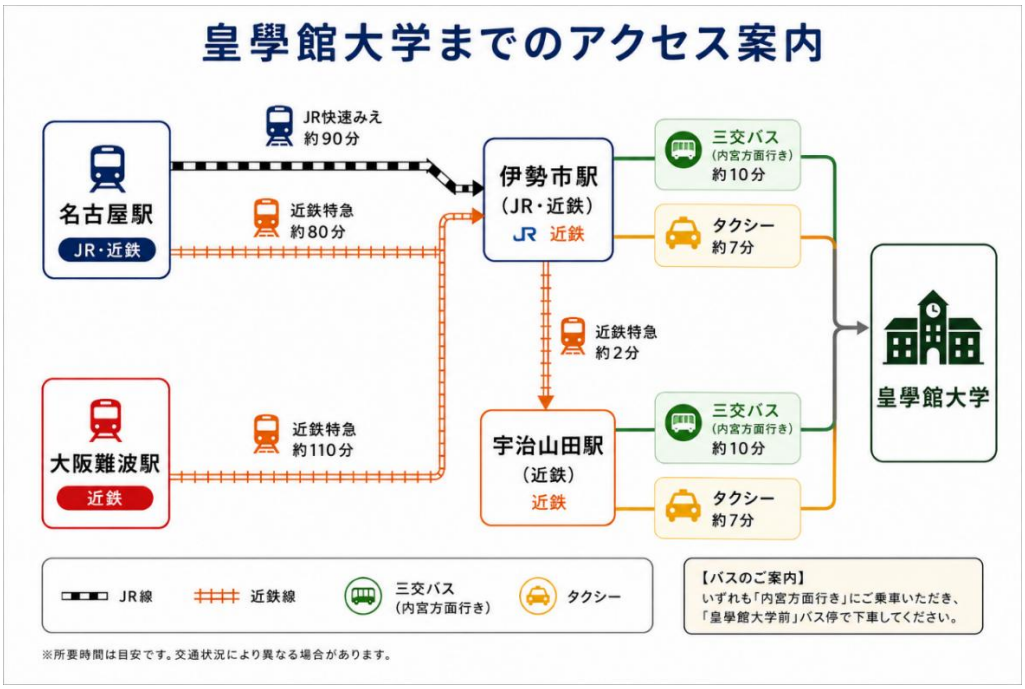
## シンポジウム・研究発表要旨

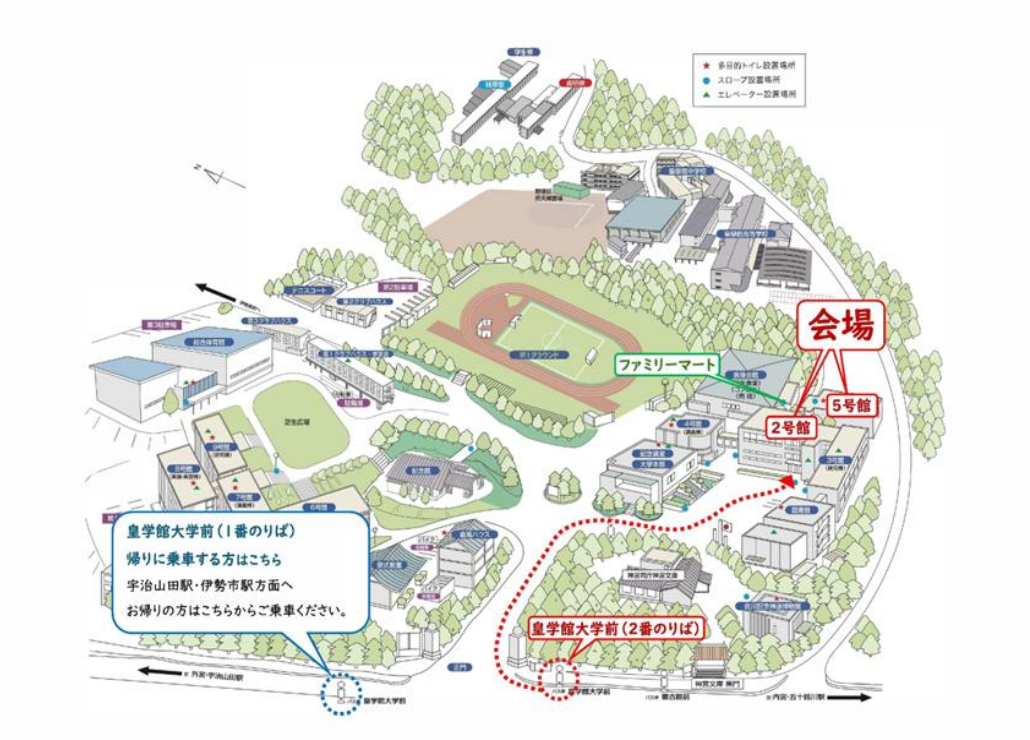
開催日：2026 年 10 月 24 日（土）

会　場：皇學館大学

（三重県伊勢市神田久志本町 1704）

# 会場（皇學館大学）へのアクセス



## 会場アクセス｜路線バス

皇學館大学　土・日・祝日ダイヤ（利用時間帯のみ掲載）

### 1　皇學館大学へ 「皇学館大学前」下車／所要約 10 分

三重交通バス　**51 系統「内宮前」行き**（外宮前・神宮徴古館前経由）

**近鉄 宇治山田駅前**
1 番のりば

| 時 | 分 |
|---|---|
| 9 | 12・32・52 |
| 10 | 12・32・52 |
| 11 | 12・32・52 |
| 12 | 12・32・52 |
| 13 | 12・32・52 |
| 14 | 12・32・52 |

**近鉄・JR 伊勢市駅前**
10 番のりば

| 時 | 分 |
|---|---|
| 9 | 16・36・56 |
| 10 | 16・36・56 |
| 11 | 16・36・56 |
| 12 | 16・36・56 |
| 13 | 16・36・56 |
| 14 | 16・36・56 |

**乗り間違いにご注意ください。** 必ず **51 系統（外宮前・神宮徴古館前経由）**をご利用ください。
「内宮前」行きでも、51 系統以外は経路が異なります。

### 2　皇學館大学から駅へ 皇学館大学前 1 番のりば

宇治山田駅前・伊勢市駅前方面　発車時刻

| 時 | 分 |
|---|---|
| 15 | 06・26・29・46 |
| 16 | 06・26・43・46 |
| 17 | 06・21・36 |
| 18 | 05・18・25・50 |

**すべての便が両駅に停車します。** 停車順は「宇治山田駅前」→「伊勢市駅前」です。

## ◎開催校からのお知らせ

【ご入構について】

大会当日は、大学構内に学会参加者用の駐車スペースを用意しておりません。そのため、自動車での大学構内への入構はできません。ご来場の際は、公共交通機関をご利用くださいますようお願いいたします。

【昼食について】

大会当日、大学内の食堂は営業しておりません。また、大学周辺には飲食店があまりございません。昼食は、伊勢市駅または宇治山田駅周辺でお取りいただくことをお勧めいたします。

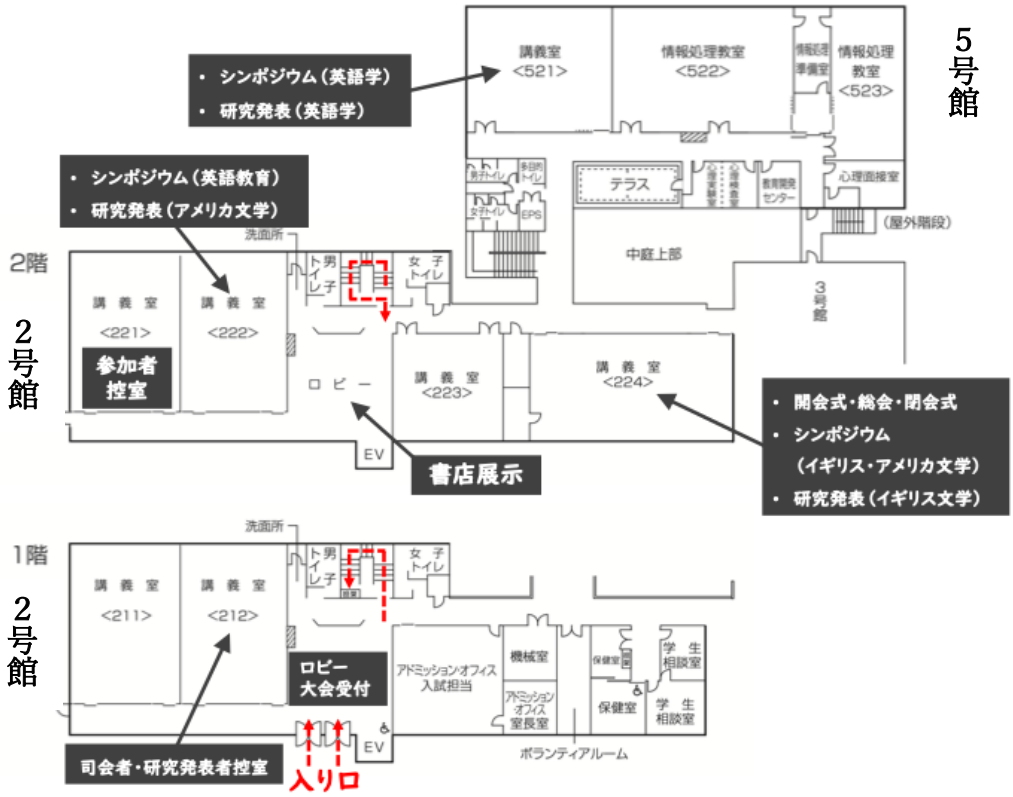
【学内コンビニエンスストア】

大学構内にはコンビニエンスストア（ファミリーマート）がございます。大会当日は 16:00 まで営業予定ですので、軽食や飲み物などの購入の際にご利用ください。

【懇親会について】

開催校の都合により、今大会では懇親会は実施いたしません。なお、参加者控室（２号館２階２２１講義室）には、お飲み物等をご用意しておりますので、ご自由にご利用ください。

# 会場（2 号館・5 号館）案内図



# 日本英文学会中部支部第 78 回大会プログラム

開催日：2026 年 10 月 24 日（土）
会　場：皇學館大学（三重県伊勢市神田久志本町 1704）

**大会受付**　12:00 より　（2 号館 1 階ロビー）

**開 会 式**　12:30～12:35　（2 号館 2 階 224 講義室）
開会の辞　日本英文学会中部支部 支部長　西山　徹

**総　　会**　12:35～12:50　（2 号館 2 階 224 講義室）

**シンポジウム**　13:00～15:10

第 1 室（イギリス・アメリカ文学）　2 号館 2 階 224 講義室
＜ホンモノ＞＜ニセモノ＞の英米文学――真正性・偽装・逆説（18～20 世紀）
司会・講師　三　原　　穂（愛知県立大学教授）
講　　師　川　崎　明　子（駒澤大学教授）
講　　師　中　垣　恒太郎（専修大学教授）
講　　師　柳　沢　秀　郎（名城大学教授）

第 2 室（英語教育）　2 号館 2 階 222 講義室
AI 時代に外国語を学ぶ意義
司会・講師　児　玉　恵　太（椙山女学園大学准教授）
講　　師　今　井　隆　夫（南山大学教授）
講　　師　浅　野　享　三（Institute for Readers Theatre, JAPAN）

第 3 室（英語学）　5 号館 2 階 521 講義室
最新言語理論の下で歴史的事実を捉える
司会・講師　近　藤　亮　一（藤田医科大学准教授）
講　　師　茨　木　正志郎（関西学院大学教授）
講　　師　小　林　亮　哉（名古屋工業大学准教授）
講　　師　杉　浦　克　哉（名古屋市立大学准教授）

**研究発表**　15:25～16:50

第 1 室（イギリス文学）　2 号館 2 階 224 講義室
第 2 室（アメリカ文学）　2 号館 2 階 222 講義室
第 3 室（英語学）　5 号館 2 階 521 講義室

| | |
|---|---|
| 第 1 発表 | 15:25～15:50 |
| 第 2 発表 | 15:55～16:20 |
| 第 3 発表 | 16:25～16:50 |

**閉 会 式**　16:55～17:00　（2 号館 2 階 224 講義室）
閉会の辞　日本英文学会中部支部 副支部長　柳　朋宏

# 研究発表一覧

**第１室（イギリス文学）2 号館 2 階 224 講義室**

司　会　　小　西　章　典（大同大学教授）

1. *Evelina* におけるお茶の時間

志　賀　紀美代（名古屋市立大学非常勤講師）

司　会　　米　山　優　子（静岡県立大学准教授）

2. 建物と庭園が生み出す恐怖――*The Woman in White* における空間表象

山　内　香　澄（公立諏訪東京理科大学講師）

司　会　　石　川　隆　士（甲南大学教授）

3. 怪物なき恐怖――“Dracula’s Guest”とゴシック空間の形成

CHEN Lu（富山県立大学講師）

**第２室（アメリカ文学）2 号館 2 階 222 講義室**

司　会　　本　田　安都子（福井大学准教授）

1. Symbolic Erasure and the Failure of the Law in Philip K. Dick’s *Flow My Tears, the Policeman Said*

Park Junghwan（神戸大学大学院）

司　会　　柳　沢　秀　郎（名城大学教授）

2. 自然の復讐と崇高―ジョージ・パーキンス・マーシュのロマン主義美学

小　口　一　郎（常葉大学教授）

**第３室（英語学）5 号館 2 階 521 講義室**

司　会　　玉　田　貴　裕（皇學館大学准教授）

1. 日英文学翻訳における品詞分布に関する研究―日英対訳文対応付けデータを用いて―

藤　原　隆　史（松本大学准教授）

司　会　　小　林　亮　哉（名古屋工業大学准教授）

2. コピー形成と再構築に関する一考察

中　村　丞　汰（名古屋大学大学院）

司　会　　若　山　真　幸（愛知淑徳大学教授）

3. V-to-T 移動の有無に関する Form Copy を用いた分析とその帰結

田　中　祐　太（中部大学講師）
近　藤　亮　一（藤田医科大学准教授）
菅　野　　悟（東京理科大学教授）
大　塚　知　昇（九州大学准教授）

# シンポジウム要旨

第１室（イギリス・アメリカ文学）　２号館２階　224 講義室

＜ホンモノ＞＜ニセモノ＞の英米文学――真正性・偽装・逆説（18～20 世紀）

| | | |
|---|---|---|
| 司会・講師 | 愛知県立大学教授 | 三　原　　穂 |
| 講　　師 | 駒澤大学教授 | 川　崎　明　子 |
| 講　　師 | 専修大学教授 | 中　垣　恒太郎 |
| 講　　師 | 名城大学教授 | 柳　沢　秀　郎 |

本シンポジウムでは、世紀も大西洋も横断し、18 世紀から 20 世紀にかけての英米文学における＜ニセモノ＞と＜ホンモノ＞の関係を検討する。扱う国も時代も異なる作家・作品を並置するが、いずれもフィクションという虚構を対象とする点で共通している。そもそも＜ニセモノ＞であるフィクションの内部で、どのようにそしてなぜ＜ニセモノ＞が＜ホンモノ＞へと転じ、あるいは＜ホンモノ＞が＜ニセモノ＞へと転じるのか。この問いに各パネリストは「真正性」「偽装」「逆説」を手がかりに答えることになる。

写本は＜ホンモノ＞か＜ニセモノ＞か？――英国 18 世紀のゴシック小説

三　原　　穂

本発表は、英国 18 世紀において、過去の真実を保証する権威ある遺物とされた写本が、ゴシック小説のなかでいかに虚構を生み出す装置へと変化したかを考察する。対象は、古写本の翻訳という体裁をとるホレス・ウォルポール『オトラント城』と、その方法を批判的に継承したクレアラ・リーヴ『イギリスの老男爵』である。両作品において写本は、史実を支える＜ホンモノ＞の記録らしさを帯びながら、同時に物語を＜ホンモノ＞らしく見せるための＜ニセモノ＞の仕掛け、すなわち文学的偽装の手段ともなる。本発表では、この真正性と作為性との緊張関係に注目し、写本が歴史的証拠から想像力を働かせる契機となるものへと変わる過程を跡づける。そこには、好古家的な事実探究から、創造性を基盤とする近代的文学観への移行の萌芽が見出される。

＜フィクション＞における＜ホンモノ＞の幽霊の作り方——ワイルド「カンタヴィルの幽霊」の場合

川　崎　明　子

幽霊は、そもそも＜ホンモノ＞がいるかどうかわからない概念である。そのような幽霊がフィクションという＜ニセモノ＞で扱われるとどうなるだろうか。フィクションだからこそ逆説的に〈ホンモノ〉の幽霊を作ることができるとしたら、それはどのような手法によるだろうか。幽霊を扱うヴィクトリア朝小説には、恋、偽装、演劇性などの共通項が見られ、これらが幽霊を＜ホンモノ＞にしたり＜ニセモノ＞にしたりすることに寄与している。中でもオスカー・ワイルドの「カンタヴィルの幽霊」（1887）の幽霊は、＜ホンモノ＞らしさにおいて群を抜いている。心霊現象研究協会（SPR）が科学的手法を駆使して霊の存在を探求する時代に、この短編がいかに幽霊の真正性を提示しうるのかを、ジャンル論、語りの技法、キャラクターの造形、プロット展開、歴史的コンテクストなどの検討をとおして明らかにしたい。

マーク・トウェイン作品における「入れ替わり」モチーフと近代的アイデンティティ
——“authenticity”をめぐって

中　垣　恒太郎

マーク・トウェイン（1835-1910）の作品には代表作『ハックルベリー・フィンの冒険』（1885）における「王様と公爵」を名乗る詐欺師の存在や、最初の長編小説『金メッキ時代』（共著、1873）の題名そのものが示すように、＜ニセモノ＞と＜ホンモノ＞をめぐる関心がくりかえし現れている。そして、偽りのアイデンティティをその場しのぎで用いながら旅を続け、物語の終盤ではトム・ソーヤーのふりをすることになるハック・フィン、服を交換することで入れ替わる『王子と乞食』（1882）に代表されるように、「入れ替わり」のモチーフはトウェインの文学において特別な役割をはたしている。本報告では、トウェイン文学における「入れ替わり」のモチーフを近代的アイデンティティの観点から探る。さらに、エスニシティやジェンダーの捉え方を根源的に問い直すトウェイン後期作品をも参照し、社会的構築、交差性（インターセクショナリティ）などの論点を交えながらトウェイン文学におけるアイデンティティをめぐる主題を再検討することにしたい。

ヘミングウェイの切り抜きと〈真実〉の虚構化
——『エデンの園』における＜ホンモノ＞／＜ニセモノ＞の逆説的メタフィクション

柳　沢　秀　郎

キューバのヘミングウェイ博物館には、作家自身やその周辺を報じた多数の「新聞切り抜き」（press clippings）が残されている。これらは業者による収集に加え、ヘミングウェ

イ自身が選別・保存したものも含まれる。その一例である 1954 年のノーベル賞受賞を報じたスペイン紙の記事には、「¡Así se escribe la Historia!（こうして歴史は書かれる！）」というヘミングウェイによる皮肉な書き込みが見られる。これは、断片的事実の集積としてのメディアが、＜ホンモノ＞の歴史を伝えるどころか、むしろそれを歪め＜ニセモノ＞化することへの警戒を示唆している。

本発表は、この視点を『エデンの園』（1986）におけるメタフィクション的構造と関連づけて考察する。作中で描かれる切り抜きの束は、社会的に構築された「作家デイヴィッド」のイメージを提示するが、それらは夫婦が共有する実像から乖離した＜ニセモノ＞の表象であるが故に、夫妻の対立の火種となっている。一方で、自分との関係に根ざした新たな物語の創出を夫に促す妻キャサリンの態度もまた、別の＜ニセモノ＞を生み出す逆説的な虚構性を帯びている。こうして本作は、＜ホンモノ＞の真実を希求しながらも、その到達不可能性を露呈し、虚構を暴こうとする行為そのものが新たな虚構を生み出すという、メタフィクションの根源的パラドクスを提示している。

## AI 時代に外国語を学ぶ意義

司会・講師　椙山女学園大学准教授　児　玉　恵　太
講　　師　南 山 大 学 教 授　今　井　隆　夫
講　　師　Institute for Readers Theatre, JAPAN　浅　野　享　三

本シンポジウムでは、生成 AI や機械翻訳の高度化により、外国語教育の前提が大きく変化しつつある現状を踏まえ、AI 時代における外国語教育の目的を改めて問い直す。外国語教育をコミュニケーション能力の育成にとどまらず、文学・翻訳を通した解釈の多様性、多面的・複眼的思考力の育成、さらには大学外国語教育の制度的・歴史的課題の検討を通して再考する。AI を排除するのではなく、その可能性と限界を批判的・選択的に捉えながら、人間にしか担えない外国語学習の価値と、これからの外国語教育の新たな役割を展望する。

### 日本文学の英訳を用いた比較読解活動の可能性―翻訳研究の知見を英語教育へ

児　玉　恵　太

生成 AI の発展により、外国語を「読む」「訳す」という行為そのものの価値が問い直されている。本発表では、英米文学ではなく学習者にとって馴染みのある日本文学の英訳作品を教材として用い、原文と複数の英訳を比較する読解活動の教育的意義を検討する。従来の訳読とは異なり、翻訳研究（トランスレーション・スタディーズ）の知見、とりわけ異化・同化といった翻訳方略の観点を取り入れることで、学習者は「どのように訳すべきか」ではなく、「なぜこのように訳されているのか」を批判的に考察することが可能となる。英訳と原文を照合する過程では、日本語表現が英語でどのように再構成され、文化的背景や価値観がどのように反映されるのかを比較文学的視点から捉えることができる。本発表では、このような比較読解活動が、外国語だけでなく母語に対するメタ的視点を育み、AI 時代に求められる批判的読解力や異文化理解を涵養する可能性について論じる。

### 言語景観と日本人英語学習者/使用者の英語から日英語の認知様式の違いを考える

今　井　隆　夫

「言語はコミュニケーションと思考の手段で、コミュニケーションの側面は AI で代替できる部分がある反面、思考の手段は代替できない」という町田（2025）の主張を受け、認知言語学を参照した思考の手段面をハイライトした英語学習法を提案する。言語における

事実とは実際に使われている表現であり、学者によってつくられた文法ルールは仮説である。しかし、学校英語教育では、仮説の１つである従来の学習英文法を絶対的なルールとして英語を表層的に教え、学ぶことが行われていることが多いようである。本発表では、言語表現には話者の捉え方が反映しており、同じ概念内容を表す複数の表現は捉え方の違いを表しているという認知言語学の考え方を参照し、日本国内でみられる言語景観と日本人学習者が生み出す母語話者とは異なる英語表現について、なぜそのような表現を生み出すのかを認知様式の違いからアプローチし、深い学びにつながる英語学習の方法を紹介する。

外国語教育の再定義 ― 共感・表現・協働を核として

浅　野　享　三

明治以降の日本の英語教育は近代化や経済成長に伴い「使える英語」という実用的コミュニケーション力育成を重視してきた。しかし，AI はいま人間の思考の枠組みをも変容させ，学校外国語教育には「英語を学ぶ意味」という根本的な問いを突きつけている。外国語道具論に軸足を置くならば，機械により既に代替可能な部分もある。革新技術時代の現在と，そして学生が生きるこれからを見据え，人間が外国語教育を通じて育成すべき資質や能力は何か。筆者はパフォーマンス形式の「リーダーズ・シアター（RT)」による文学作品の読解活動に着目し，体験型・参加型授業を核とした英語教育に強い関心を持つ。人類の共通の財産である文学作品を読みながら読解力だけでなく，発表の過程において培われる「達成感」や「連帯感」を得て，他者に共感する心を育成したい。このシンポが英語教育研究と文学研究の双方の関係者間の対話を促進することを期待する。

## 最新言語理論の下で歴史的事実を捉える


| | | |
|---|---|---|
| 司会・講師 | 藤田医科大学准教授 | 近　藤　亮　一 |
| 講　　師 | 関西学院大学教授 | 茨　木　正志郎 |
| 講　　師 | 名古屋工業大学准教授 | 小　林　亮　哉 |
| 講　　師 | 名古屋市立大学准教授 | 杉　浦　克　哉 |


現在、様々な言語現象に対して、Chomsky (2021, 2024)が提唱した GK/MC の枠組みを用いた分析が活発になされており、これらの有用性や新たな可能性が模索されている。GK の革新的な部分は、統語上の同一要素をコピーとして関連づけるコピー形成(FormCopy)という操作を提案した点である。一方、MC の革新的な部分は、ボックスという概念を用いて、従来は上位フェイズの末端への移動として捉えられてきた現象に対して新たな分析を提案した点である。この枠組みでは、下位フェイズの末端へ内的併合した要素は、さらなる内的併合を受けなくなるが、インターフェイスにおける解釈の際に上位フェイズの主要部から利用可能になると仮定することで、当該要素の上位フェイズへの移動が導出される。本シンポジウムでは、いくつかの歴史的事実に対して GK/MC の枠組みを用いた分析を提案することで、今後の史的統語論研究に新たな視座を示すことを目的とする。

## 後置属格の発達に関する Box 理論からの一考察

茨 木 正志郎

本発表では、英語の後置属格（a friend of mine, that nose of his 等）を、Chomsky (2024) の Box 理論を手がかりに再検討する。後置属格については、Jackendoff (1977)や Barker (1998)が部分構文との関連から分析し、一方で、Jespersen (1927)や Taylor (1996)などは、後置属格を同格的な of 構文との関連から捉えている。本発表では、これらの議論を踏まえ、所有者と被所有物の関係が名詞句内でどのように形成され、後置属格として解釈されるのかを考察する。具体的には、Box 理論を名詞句領域へ拡張し、低い位置で形成された所有関係が高いフェイズで焦点化・外在化されると分析することで、後置属格の派生と解釈を捉える。あわせて、中英語以降に見られる後置属格の出現・発達にも触れ、Heltveit (1969) が指摘する二重決定詞構造と後置属格との関係を、コーパスから得られたデータに基づいて検討する。これにより、後置属格の発達過程において、名詞句内部の構造と派生にどのような変化が生じたのかを明らかにし、英語名詞句の通時的変化を考察するための一つの視点を示す。

there 構文の歴史的発達に関するコピー形成とボックスを用いた分析

近　藤　亮　一

一般的に、現代英語の there 構文における there は虚辞であり主語位置に生起する名詞的要素であると分析されている。一方、当該の there の歴史的発達に関する先行研究(e.g. Hosaka (1999))では、それは場所を表す副詞的要素から発達したと想定されている。本発表では、there 構文の歴史的発達に対してコピー形成(Chomsky (2021))とボックス(Chomsky (2024))を用いた分析を行う。具体的には、初期英語において文頭にある there はボックスに入り上位に位置するフェイズ主要部にアクセスされることによりその位置で発音されるという可能性について検討する。また、素性間のコピー形成を用いて現代英語の there 構文を分析している Omune (2023)や、その他の先行研究(e.g. Honda (2020))の分析に基づき、there 構文の派生においてコピー形成がどのように適用されてきたのかについても検討する。

ボックスに基づく主要部移動の再分析

小 林 亮 哉

近年の生成文法では、主要部移動は解釈効果を伴わないことから、統語部門ではなく外在化の過程で扱うべき現象であるとの見方が広がっている。例えば、Chomsky (2021)は、Amalgamate という操作が外在化の過程で循環的に適用されると提案しているが、主要部移動の外在化のメカニズムについては、なお不明な点が多い。本発表では、Chomsky (2024)の提案するボックスという概念を主要部移動に拡張して再分析を試みる。具体的には、動詞は V から *v* への内的対併合を一度だけ受け、その後は統語的には移動せず、上位のフェイズ主要部によるアクセスの結果として V-to-T や V-to-C が見かけ上実現されると論じる。この分析により、A 移動や A′移動だけでなく、主要部移動も同一の計算原理の下で統一的に捉えることが可能となると主張する。さらに、英語史における動詞移動の消失についても、アクセス位置の変化として説明できる可能性を示すとともに、本提案の経験的妥当性について検討する。

ボックスの応用可能性について: 付加詞島制約に焦点を当てて

杉 浦 克 哉

Chomsky (2023) 以降、ボックスを使った分析が Kitahara and Seely (2025) や Nakashima (2026)などで提案されている。本発表では付加詞からの wh 抜き出しに焦点を当て、ボックスを用いた分析の応用可能性について検討する。議論の出発点として Nakashima (2026)を用いる。彼は External Merge により母型動詞句と併合した付加詞節はボックスに入ると仮定した上で、ボックス内部のボックス要素へは上位の C からアクセ

スできないと提案し、wh 抜き出しが阻止されると説明する。この分析は θ 位置から Internal Merge により phase edge へ移動した要素がボックスに入ると提案する Chomsky (2023)の枠組みを拡張し発展させたものであるが、このような拡張がどの程度まで認められるかは慎重に検討すべきと考える。加えて、Nakashima も認めている通り、彼の提案は一部の非定形付加詞節からの wh 抜き出しを説明できない。本発表では Chomsky (2013)以降の枠組みに基づき付加詞島制約を再検討する。加えて 17 世紀以降に現在分詞節が経験した付加詞から項への再分析についても扱いたい。

# 研究発表要旨

**第１室（イギリス文学）2 号館 2 階 224 講義室**

司　会　　大同大学教授　　小　西　章　典

第 1 発表

*Evelina* におけるお茶の時間

名古屋市立大学非常勤講師　志　賀　紀美代

フランシス・バーニー（Frances Burney 1752-1840）の小説 *Evelina; or, The History of a Young Lady's Entrance into the World* (1778)は、田舎育ちの主人公 Evelina が、都会での社交生活における戸惑いや失敗を経て、結婚に至るまでの成長を描く。本作品には Evelina の成長の舞台となるイギリス 18 世紀後半の娯楽や社交の様相も詳細に描かれているが、社交文化の重要な場である喫茶の場面はこれまであまり注目されてこなかった。そこで本発表では、作品に繰り返し描かれるお茶の時間に着目し、当時の喫茶習慣の文化的意義を踏まえながら、Evelina の意識や登場人物たちとの関係性の変化を考察する。物語の展開におけるお茶の場面の役割や効果を明らかにし、Evelina の成長という主題について新たな解釈を試みたい。

司　会　　静岡県立大学准教授　　米　山　優　子

第 2 発表

建物と庭園が生み出す恐怖――*The Woman in White* における空間表象

公立諏訪東京理科大学講師　山　内　香　澄

本発表は、ウィルキー・コリンズの『白衣の女』（*The Woman in White*）における建物・庭園などの空間描写に注目し、それらが恐怖や支配の表象としてどのように機能しているかを考察する。センセーション小説は、超自然的な怪異ではなく、現実の日常空間に恐怖を持ち込んだ点に特徴がある。本作の舞台であるブラックウォーター・パークは、高い鉄柵や密集した樹木によって閉鎖性が強調され、ローラの監禁や精神的抑圧を象徴する空間として描かれる。また、庭園や教会の祭具室といった空間も、登場人物の監視や自己拘束を表す重要な舞台となっている。これらの背景描写は単なる舞台設定ではなく、登場人物の心理や権力関係を可視化し、物語のサスペンスを支える役割を担っている。本発表では、ゴシック小説とセンセーション小説の系譜を踏まえながら、空間表象の観点から作品の恐怖表現を再検討する。

司　会　　甲南大学教授　　石　川　隆　士

第 3 発表

怪物なき恐怖——“Dracula’s Guest”とゴシック空間の形成

富山県立大学講師　CHEN Lu

本発表は、Bram Stoker の短編 “Dracula’s Guest” を、怪物の不在とゴシック空間の形成という観点から再検討する。本作はしばしば *Dracula* から削除された前章として扱われ、その意義も長編との関係で論じられてきた。だが、こうした読解は吸血鬼の存在を前提とする一方で、作品の大部分を占める環境描写や空間構成の機能を十分に説明していない。本発表は、主人公がワルプルギスの夜に関する警告や土地の伝承、雪嵐、墓地といった環境のシグナルを繰り返し読み損なう過程に注目する。この環境読解の失敗が不安と緊張を増幅させ、怪物の顕現以前にゴシック空間を形成することを論じる。さらに、この構図が *Dracula* 本編における空間的不安の形成とも連続していることを指摘する。

**第 2 室（アメリカ文学）2 号館 2 階 222 講義室**

司　会　　福井大学准教授　　本　田　安都子

第 1 発表

Symbolic Erasure and the Failure of the Law in Philip K. Dick’s *Flow My Tears, the Policeman Said*

神戸大学大学院　Park Junghwan

This presentation examines Philip K. Dick’s (1928-82) *Flow My Tears, the Policeman Said* (1974) as a narrative of Symbolic and Imaginary erasure, and of the Law's failure to secure the subject it attempts to capture, due to its own inherent instability. Jason Taverner’s displacement is not limited to the loss of celebrity or slipping into a new world but emblematic of a cut from the Symbolic and Imaginary orders that had sustained his sense of identity and subjectivity. The instability of the Law is further exposed through the police general Felix Buckman, who appears to embody order, while his twin sister Alys represents transgression. Felix’s incestuous relationship with Alys shows that the Law cannot separate itself from the excessive enjoyment that it purports to repress: Thus, the Law is not an impartial, logical structure but rather a libidinally driven, irrational structure. This becomes especially clear when Felix attempts to murder and frame Jason for Alys’s death, despite his knowledge of Jason’s innocence. Ultimately, *Flow My Tears* presents the Symbolic and Imaginary orders as unstable, under threat not only because of the reality-bending characteristic of Dick’s works, but because of the libidinal dimensions that they consciously or unconsciously embody.

司　会　　名城大学教授　　柳　沢　秀　郎

第 2 発表

自然の復讐と崇高—ジョージ・パーキンス・マーシュのロマン主義美学

常葉大学教授　小　口　一　郎

本発表は、19 世紀アメリカの環境思想家、ジョージ・パーキンス・マーシュの『人間と自然』（1864）を、思想史の観点から解釈する試みである。マーシュは、人間による自然環境への過度な介入は、洪水、地滑り、居住可能な生態系の破壊などの形で、自然の「復讐」を招くと論じた。この概念は、崇高美学と先験論という広義のロマン主義の系譜に位置づけることができる。マーシュが使うイメージはエドマンド・バークの崇高論と重なり、自然への恐怖とその克服の機序はイマニュエル・カントの「力動的崇高」を想起させるからである。また、原初の崇高な風景を植生が包摂し、美的景観を形成するという考え方は、ウィリアム・ワーズワスの風景論と共通する。さらに、人間は道徳的・理性的主体として自然の次元を超えると主張したカントの先験論とも、マーシュの思想は接続する。この一連の議論により、本発表は、環大西洋的ロマン主義の文脈でマーシュを再評価する。

**第 3 室（英語学）5 号館 2 階 521 講義室**

司　会　　皇學館大学准教授　　玉　田　貴　裕

第 1 発表

日英文学翻訳における品詞分布に関する研究—日英対訳文対応付けデータを用いて—

松本大学准教授　藤　原　隆　史

本発表は、『日英対訳文対応付けデータ』160 作品を対象に、英語原文と日本語訳の品詞分布差がジャンルによってどの程度説明されるかを検討する。各作品の品詞分布間距離を Jensen–Shannon Divergence（JSD）で測定し、JSD を従属変数、ジャンル、作品規模、日英トークン数比、平均セグメント長を説明変数とする回帰分析を行った。作品数 5 未満のジャンルを除いた 154 作品の分析では、ジャンル効果は統制後も有意であった（Wald $\chi^2 = 43.05$, $df = 7$, $p < .001$）。特に昔話・民話・童話、児童文学、政治・哲学・思想文書などで高い JSD が確認された。一方、作品規模そのものの効果は限定的であった。以上より、日英翻訳における品詞分布差は、単なる作品長やテキスト量の違いではなく、ジャンルに固有の構文・情報配置の違いを反映する可能性が示された。

司　会　　名古屋工業大学准教授　　小　林　亮　哉

第 2 発表

コピー形成と再構築に関する一考察

名古屋大学大学院　中　村　丞　汰

本発表では、コピー繰り上げ構文 (Copy Raising: CR)を手がかりとして、Chomsky (2021)における External Merge (EM)と Internal Merge (IM)の区別の方法を再検討する。Chomsky (2021)では、FormCopy (FC)により形成されたコピー関係のうち、IM により派生された要素間でのみ再構築解釈が得られることが示唆され、ある要素が EM と IM のどちらにより派生されたのかは、意味の二重性と θ 理論により区別される。しかし、Nakamura (2026)に従い、CR の主節主語と補部節主語はそれぞれ EM で派生に導入され、FC により関係付けられるとすると、主節主語は θ 役を付与されないため、誤って IM により派生されたコピーとして扱われる可能性がある。

本発表では、Pérez (2018)の Inclusion-S に基づき、FC の適用を受ける下位要素が持つ全ての素性の値を上位要素も持つ場合、両者は IM-configuration をなすと提案する。この提案により、CR の主節主語の EM による導入が保障され、補部節主語位置への再構築が許されないことが説明される。また、この分析は Tough 構文などの諸構文にも拡張できることを示す。

司　会　　愛知淑徳大学教授　　若　山　真　幸

第 3 発表

V-to-T 移動の有無に関する Form Copy を用いた分析とその帰結

中部大学講師　田　中　祐　太
藤田医科大学准教授　近　藤　亮　一
東京理科大学教授　菅　野　　悟
九州大学准教授　大　塚　知　昇

本発表では、同一要素間で成立する Chomsky (2021)の Form Copy (FC)を発展させ、2 つの要素が持つ素性が完全に同一でなくてもそれらが部分集合の関係にあれば、FC 関係が成立すると提案する。V-to-T 移動の有無は統語部門より前に T が V と複合主要部を形成するか否かによるとする Biberauer and Roberts (B & R) (2010)の分析に基づき、フランス語などでは複合主要部 T-V は V が持つすべての素性を含むため、上位要素である T-V が下位要素である V と FC 関係に入ることにより V-to-T 移動の効果が得られると主張する。一方、英語などでは複合主要部が形成されることはなく、T と V が持つ一部の素性のみが FC 関係に入るに過ぎないため、移動ではなく Agree 関係の構築に留まると論じる。本分析に基づき、V-to-T 移動の有無と空主語の可否に関する B & R の観察についての分析も試みる。

# 大会関係役員一覧

| | | |
|---|---|---|
| 支部長 | 西　山　　徹 | （名城大学） |
| 副支部長 | 柳　　朋　宏 | （中部大学） |
| 支部選出評議員 | 田　中　智　之 | （名古屋大学） |
| 支部代表理事 | 内　田　　勝 | （岐阜大学） |
| 事務局長 | 柳　沢　秀　郎 | （名城大学） |
| 事務局長補佐 | 久　米　祐　介 | （名城大学） |
| 事務局長補佐 | 田　中　祐　太 | （中部大学） |
| 書　記 | 安　保　夏　絵 | （中部大学） |
| 監　事 | 廣　野　允　紀 | （愛知大学） |

**大会準備委員**（◎委員長　〇副委員長）

| | | |
|---|---|---|
| 英文学 | 石　川　隆　士 | （甲南大学） |
| | 小　西　章　典 | （大同大学） |
| | 米　山　優　子 | （静岡県立大学） |
| 米文学 | ◎本　田　安都子 | （福井大学） |
| | 柳　沢　秀　郎 | （名城大学） |
| 英語学 | 〇北　尾　泰　幸 | （愛知大学） |
| | 小　林　亮　哉 | （名古屋工業大学） |
| | 玉　田　貴　裕 | （皇學館大学） |
| | 若　山　真　幸 | （愛知淑徳大学） |

**開催校大会準備委員**

玉　田　貴　裕


**日本英文学会中部支部事務局**

〒461-8534 名古屋市東区矢田南 4-102-9

名城大学 ナゴヤドーム前キャンパス 外国語学部

柳沢秀郎研究室内

E-mail: chubu@elsj.org

HP: https://elsj.org/chubu/